

マメ科食いシジミ類共通飼育法

1. トラフ、ウラナミシ、ルリウラナミ、オジロ、ウスアオオナガウラナミ、カバイロ、サツマ、ルリ、ウラギン、リュウキュウウラボシ、ツシマウラボシ、
2. シルヴィア、ハマヤマト、ヤクシマルリ、ツバメ、ヒメシ、ミヤマ、アサマ、 2006. 5. 28 仁平 勲



始めに

マメ科の特殊な食草食い？のオオルリシジミ、カクモンシジミ、ヒメウラナミシジミ等を除き一般的なマメ科食いと思われる種達は1の主に花、実食いと2の葉食いとに分かれるが、こと飼育に関しては個々にあげて説明するほどの差異はない、確実に確認したわけではないが、最初に特殊な…と言った3種でもその限りではないかもしれない。それほどシジミチョウ科のマメ科食いの種達はほぼマメ科なら何でも食うといっても過言ではないようである。そして飼育においても共通項が多い。しかし、ことシジミ類に関してはマメ科と言ってもほぼ主として草本のものに依存しているのが多いことは間違いないであろう。

ここにそれらの推測もふまえて今回は、卵（シロウラナミシジミの項参照）から飼育とか幼虫採取から飼育とかは別として、上記題目の8~9割り方飼育した経験からと共通すると思われるところに重点をおいて進めたいと思う。

2の葉食い（これとて決定的なものでなく花や実も食うが主に葉という意味である）は本州産がほとんどでいわゆる南方の沖縄、八重山地方産はふくまれない。と言うことは食草や時期的な心配はあまりないと言っ

てよいだろう。普通にプラケースなどで飼育しても容易である。しかし夏場にかかる場合などはやはりプラケースではビールス発生などが考えられるので、鉢植えや地植えの食草を用意して袋賭けして飼うのが賢明である。春先~初夏、秋口であれば野外の食草を茎ごと20~30cmくらいに切りそろえて新聞紙にきちんとくるんでそれをビニール袋に入れて、口を輪ゴムや紐で閉じ冷蔵庫で保管すればかなり長い間新鮮さを保ち1回の補給くらいで大体行ける。あとは毎日の糞掃除をきちんとやることである。年数回の発生で晩秋にかかるような種は食草が飼育地より早く終わるものが多く間に合わない場合は栽培、市販（最近ではほとんど無農薬のものが多い）のエダマメ、インゲン等を裂いて与えればたいい食ってくれる。

1の花、実食いは南方産や多化性のものが多く、現地ではいつでも大体何かのマメ科植物の花や実があるのが普通であるが、こちらでは早春や晩秋の野外には何もない場合が多いので要注意である。近年は年間を通じ前記のエダマメやインゲンが手に入りやすくなっている所以他们に活路を求めること大である。

シジミ類の卵は小さく野外で見つけ数を得

るのは難しい（よってやはり母蝶からの採卵がベターである）幼虫も花や実には穴を開けもぐりこんでいる場合が多く、たいていアリを伴うと言ってもこれまた探すのは難しい。よって大きなプラケース一杯に花や柔らかい新実を詰め込んで持ち帰るのが手っ取り早い、蓋を開けてみてアリがいるようだったらまず幼虫がいると見て間違いない。毎日見ているとボチボチと各ステージの幼虫が見出せる。勿論卵も含まれているだろうが孵化が早いので小さな弱令の場合が多い、花や実が腐るころにはかなりの数の数種の幼虫が見つかるはずである。

この類の 8~9 割り方は共食いをするので見つけ出したら必ず 1 頭ずつにすることを忘れてはならない（時期的にプラケースで良い）横着をしてそれを怠ったり遅れたりすると大変です。ウラナミシジミやウラギンシジミが混ざっていると獰猛なので他の種の幼虫は直ぐ餌食になってしまいます。花や柔らかい実は新鮮なうちに紙袋に入れ同じくビニール袋に入れて冷蔵庫保管をすればかなり持ちます。房から花のみ外れても支障はありません。野外で花、実が調達できないようでしたら、前記の市販のママの出番です。



図はインゲンを食う獰猛なウラナミシジミの終令幼虫です。

以上が各種共通の飼育法ですが、転がった蛹になった場合は尾端をバンドでダンボールなどに固定して羽化不全を防ぐことを忘れないでください。またウラギンシジミの蛹はプラケースに蛹化してもはずそうとせず、そのまま羽化させてください。蛹の構造で腹の部分が真空になっていてピタッとくっついてますので、無理にはがすと蛹そのものが壊れてしまいますので要注意です。



2005 冬に飼育したヤクシマルリシジミとウラナミシジミの蛹です。

皆さんも機会があったら沢山作って楽しんでください。